郷土はんのう

第18号

完成間近い畑トンネル（明治42年）
赤田喜美男編『写真集・飯能』より

平成10年6月の畑トンネル

飯能市郷土館の催物「飯能の古写真展」（仮称）平成10年10月中旬～12月上旬予定

● 郷土館では、飯能地方の古い写真を探しています。お持ちの方は郷土館まで。

R 100 この印刷物は、再生紙を100%使用しています。

南高麗・金蓮寺

郷土史をつくる『南高麗郷土史』発刊余話

増岡正文

『南高麗郷土史』を刊行することが決まった。

●南高麗の郷土史をつくろう！

南高麗の郷土史をつくろうという話が始まったのは、平成五年の秋のことであった。後、南高麗郷土史研究会長になるS氏の呼びかけで、各地区から十数名の人たちが公民館に集まり、昔々南高麗村の地域の郷土の歴史をまとめて郷土史として、後の世に残そうというのである。

さて、集まった人たちは、地区の代表者ということであったが、それまで郷土史の編集・発行を実際に経験したものはいなかった。趣旨は分かるが、さて、それを作るとなると何をどうやっていいのか分からないというのがほとんどの人たちの実情であったから、本論賛成、各論反対とまではいかずとも、先のことを考えると不安があった。積極的な発言はなかった。しかし、趣旨は確かに結構なことで、だれかがやってくれるのだったらこれほど結構なことはないということで、結局、郷土史研究会をつくり、その中心事業として、『南高麗村』は、誕生したのが明治二十二年で、それが大正時代を経て、飯能町へ合併したのが昭和十八年、一八九年から一九四三年までの約五十三年間の寿命であった。その間にいくつかの公共施設のその名前が残されているが、年配の人たちにとってはやはり『南高麗村』という名前にはそれなりの愛着がある。飯能には『飯能郷土史』があり、そこには南高麗のことも記載されているが当然、概括的である。この地域をまとめた郷土史をつくるとすれば、明治・大正のことを知っている人が残っている今をおいてない、こんな気持ちが集まった人たち共通の思いであった。

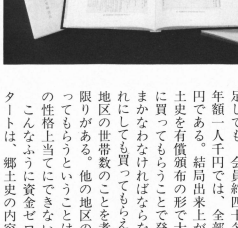
もともと『南高麗村』は、

●編集委員会ができる

平成六年秋に郷土史研究会が正式に発足し、十二月に九名の編集委員が委嘱された。

年が明けて平成七年、編集委員会が開かれ、編集方針や、発行までの予定などが検討された。できれば平成七年の暮れには発行したいという希望であったが、それは目程的にとても無理だということで、後に発行の予定は八年の秋ごろということで修正された。

編集を任されたとはいえ、素人集団である。どう考えても時間が足りない。資料・史料の収集調査、原稿の執筆、編集、それに校正作業もいくら急いでも数か月必要と考えられたが、本を作る経験の少ない人たちにとっては、この辺の手順と時間の計画がなかなか予測できないことであった。



編集方針としては、まず取り上げる地域の範囲と、年代について検討され、広がりとしては、昔の生活圏のことを考えて青梅の地域とのつながりも視点に入れて記述しようということが決まり、内容としては、飯能郷土史の史料編、通史を参考にしながら、それに南高麗の地域の特性を補足しながら通史の形で記述することになった。

●資金のこと

さて、編集方針はほぼ固まったようだが、一方で、編集方針に関する重要な事項は資金の問題であった。郷土史研究会は発足しても、会員約四十名、会費年額一人千円では、全部で四万円である。結局出来上がった郷土史を有償頒布の形で大勢の人に買ってもらうことで発行費をまかなわなければならない。それにしても買ってもらえる数は、地区の世帯数のことを考えると限りがある。他の地区の人に買ってもらうということは郷土史の性格上当てにできない。

こんなふうに資金ゼロでのスタートは、郷土史の内容や、記述の方法、分量（頁数）などの関係で、切り離して考えられ重大問題であった。無理に買ってもらうこと、なんだこんなものと言われても情けない、欲張って大冊にして価格が高くなり過ぎては買ってもらえない。ほどほどのところで、なんとか大勢の人に喜んでもらえるものをというのが、本当のところ編集方針を決める最大の問題であった。

＊　＊　＊

こんな事情もあり、なるべくたくさんの方から資料を提供していただき、それを内容に加えることができたら頒布数にもいい影響が出るだろうということで、各地区の研究会の理事さんを頼んで、これはどういうものがあったら是非資料提供してほしいとお願いし、また公民館の広報などを通じてお願いした。

結果的には、地区内のY氏の篤志寄付をいただき、また市の地域振興事業の資金援助もあり、どうやら黒字で一区切りすることができたことはありがたいことであった。

●資料収集と調査

地区の人たちの協力を得て、ということは、この事業を通じて郷土の歴史を意識し、再確認してもらうというねらいもあった。若い人たちが昔のことを知らない、興味がないというのは当然かもしれないが、まだ、明治生れの人も残っている、大正、昭和のいわゆる戦前の時代に生きてきた人も多い。そうした人たちに昔を思い出してもらい、語ってもらう、そのことを自体に意味があるのではないかと考えられた。

そんなわけで、いわゆる旧家のきんしゃと登録されている土蔵の中の資料に併せて、いろいろ

な家のいままで取り上げられることのなかった資料、例えば「伊勢道中日記」だとか「金銭出納帳」あるいは「百合球根栽培記録」などを取り上げることができた、貴重な写真や古地図なども発見することができた。

＊　＊　＊

また、石像遺物や、ふだんは関係者だけが知っている小さな社や祠、あるいは地質や植物などの調査を行なうことによって、編集委員自身が勉強させられることも多かった。しかし、時間の制約があったため、地域調査は不十分であったことを感じているが、後に、公民館主催の地域学習に多いに役立っている。

●原稿を書く

原稿を書く前に、約束事を決めておかなければならない。文体のこと、漢字の使い方のこと、縦書きの場合、特にこのような内容のものは数字の表記が問題になる。原則的には一般新聞の表記に従うということで、了解して始めたが、具体的なことになると「どう書き表わしたらいいか疑問が生じてくる。昔の文書などは旧字体のものが多いし、それに当て字が使われている。直したらいいものか、そのままの使い方で表記するかなど、その都度検討することになる。

それより困ったことの一つは、執筆を担当した編集委員の書いた文章が、全体としてバランスを欠くということであった。当初、章立ては第一章から第十章まで、十章に分けて分担するということであったが、資料中心でまとめたもの、読み物風にまとめたものなどかなり執筆者によって差が生じた。無謀章の性格内容によって差があるのは確かだが、それでもある程度の整合性は確保しなければならない。そんなことで、資料、内容を大きく変えることなく、文章を書き直すということになり、結果的には実際の執筆者を四人にしぼり、一部頭から書き直すという予定外の作業をすることになった。

書き始めは文字数、行数を本文に合わせた規定の原稿用紙を使用したが、始めてみると修正箇所が多くて、とても赤字の修正では間に合いそうもない。途中から方向を変えて原稿用紙は下書きにだけ使い、全てフロッピー（FD）を使うことにした。出稿も全てフロッピー（FD）で行なったのでは、この間のオペレーターの経費がかなり節減できたものと思う。とくにこの点ではパソコンをお持ちのM氏の力が大きい。文明の利器を郷土史の執筆に利用するというのも時の勢いであろう。

●編集と校正作業

一般の書物の場合、原稿を出してしまえば、あとは見直し作業、校正だけだが、この種の本になるとそうはいかない。実際に出稿するまでの大仕事が編集割り付けの作業である。どの位置にどんな資料を、あるいはどんな写真をということで、文字の大きさや書体の指定など、細かく注文を出さなくてはならない。この作業を綿密に行なっておかないと、あとで印刷業者を泣かすことになる。

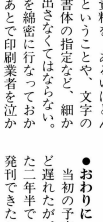
校正は初校、二校、三校、最終校（青焼）と合計四回を予定したが、初校、二校とも、四人の執筆者が共同で行なったので、時間はかかったが、丁寧な校正を行なうことができた。おかげで、独り合点の間違いをしなくてすんだ部分がかなりある。

当初の予定では総ページ数四五〇ページ前後という予定であったが、仕上がった本のページ数はぴったり四五〇ページであった。幸い印刷、製本にも念を入れて仕事をしていただき、できあがりは予想以上であった。

●おわりに

当初の予定からすれば半年ほど遅れたが、それでも実質たった二年半で『南高麗郷土史』が発刊できたことは編集担当者自身としても驚きであった。結果的には、素人の、恐いもの知らずだからできたとも思えるし、金が自由に使えたら逆に独りよがりの郷土史になってしまったかも知れない。残念ながら、資料収集は不十分であったことは自認せざるをえないが、ボランティアの手作りの郷土史が形になったということで、それなりの満足感はある。

なお、平成九年秋には『資料集1』を発刊し、できれば続けて『資料集2』の刊行も検討中である。



★お求めは…
南高麗公民館まで
☎七二一二八〇五
◆南高麗郷土史　三、五〇〇円
◆資料集1　一、〇〇〇円

飯能地方
絵馬の調査

調査委員のだれもが、絵馬を見つけると、いちもあわててしまった。気持ちが和むところが、どんどん固くなってしまったのである。

「これは、何が描かれているのだろうか」というのが、それからの問題である。

「どこに何でもいいから、早く覚えてくださいな」調査者対象の談話室がもだれた。

けれども、その絵馬が訴えるものと、現在の調査で解析されるものには著しく違っているかも知れない。まったく危ないところであった。

少しずつはぎ取って、基本からやり直してみたが、仲々順序よくはいかない。各人の感想が枝分かれしてしまうのである。

「牛若丸と天狗」がいるので、このように書くと、一般的には「鞍馬山の図」と解説するのだという。正誤表まで用意したが、地元ではそうは言わないなら、なぜ効率の悪い話である。言葉の混乱でもないのだから、いろいろな人の考えが、こんがらかって伝えられたと言う他には ない。調査にあたり、なまじ漢語や物語を知っているばかりに、間違ってしまったり、他人の話が奇異に感じられるから不思議である。

編集会議の、その時々の雰囲気でも変わっていく、何だか滅茶苦茶なのである。

その時の折願の声が聞こえたらねえ……時折、大まじめで誰かが発言していた。

（岡野　達雄）

暮らしの中にもっと木を

住まいと木の文化

建築家　吉野　勲

▲昨年暮れの温暖化防止京都会議は、私たちに地球環境の危機を自覚させ、日常生活の見直しの必要性を実感させた、と言える。

楽をして便利な生活を求める余り、二酸化炭素などの排出量が増え、温暖化ガスの増大による地球規模での環境悪化が心配されている。海や森林に吸収されない二酸化炭素が、炭素に換算して、大気中に毎年三十三億トンづつたまっている、と言われる。温暖化防止には二酸化炭素排出量の五十パーセント以上の削減が必要との科学者たちの知見もある。

▲「民家こそが、人間と自然を結ぶ、非常に重要な接点」と、向井潤吉に言わせた民家は、土地の木・土・石・草といった自然素材を使い、地元の大工さんがつくり、移築や材料の再利用も当り前のことであった。

例えば、屋根の茅は村の共有のものを使い、やがて堆肥として、畑の土にすき込まれた。雑木林は燃料源、堆肥源、野性小動物の宝庫、子どもたちの遊び場であった。広葉樹は薪炭、建築用材、家具、農具、樹器や枕木、郷土玩具など多方面に活用された。針葉樹は柱や梁などの用材として、間伐材も足場丸太、坑木などに活用された。

このすぐれてエコロジカルな仕組みの中に、持続可能な社会への示唆と暮らしの中で生きた"木の文化"を見ることができる。

▲今の住まいには多種多様な建築材料が使われているのに驚かされる。外壁材・屋根材・床材・内壁材・天井材の新製品が毎年開発されて使われる。こうした新建材の多くに石油が利用されている。

家の構造も、木質系・コンクリート系・鉄骨系など多彩。木質系のなかにも在来軸組とツーバイフォーがあるが、年々木造率は下がっている。つまり、暮らし方が、一九五〇年代前後の大油田の発見により、良くも悪くも大きく変わってしまった。

今日、家をつくり、維持し、壊すには、膨大なエネルギーを必要とする。また、人間の生活に新鮮な空気・水・食料や電気エネルギーなどを必要とし、排ガス・汚水・ゴミなどを排出し環境を悪化させている。

今の家は二十年程で取り壊される。そのとき三十坪の家は、生活ゴミに換算すると三十五年分になるとのこと。その解体ゴミからダイオキシンなどの科学物質が環境に蓄積されて行く。かつての民家と今日の住まいの違いが見えて来る。

▲気密化された住まいの中で、カビ・ダニの異常発生や新建材などに含まれるホルムアルデヒド、有機リン系化合物などの化学物質による室内空気汚染が化合物質過敏症やアレルギーなどの健康被害を引き起こしている。

生活環境や職場環境が同じでも、その症状は人により異なり、アトピー、吐き気、めまい、頭痛、不安など様々である。なかには、家を建て直したのに入居できずに庭にテントを張って住んでいる人もいる、と言う。

こうした状況の中で、健康な家のつくり方と住まい方が求められている。

▲戦後の特に高度経済成長以降のものには何処か薄べったさ、嘘っぽさを感じる。大量生産、遠距離・高速輸送、大量消費と言った今日の産業・生活体系は全国何処へ行っても同じ、金太郎飴現象を各地で引き起こしてしまった。

見方を変えると、戦後の復興は長年かけて創られてきた固有の地域文化を失う過程とも言える。日本は工業化を過ぎるなかで、利便性・経済性・普遍性のもとに何処か画一的なものになってしまったように思う。

かつて、旦那と職人との息の合っていた時代の建築の方がどこか心が通っている。こうした歴史の積み重ねのなかで、築いて来た"木の文化"も、そのひとつと思う。

▲木は人間に近い材料であり、湿度の調節、熱の遮断、利用の多様性・多段階性、静電気の未発生、二酸化炭素の固定など沢山の利点をもっている。また、欠点とされる燃える、腐るといったことも、土に還ると考えると納得がいく。

木は人間の五感になじみ、ぬくもり・あたたかさ・やさしさと言った人間の気分にも影響する。木は伐った時の樹齢以上の使い方をすれば、すばらしくエコロジカルな素材であり、再生産可能な無限の資源だ。生活のあらゆる場面や空間に木を活かして使うことを提案したい。

今日、山の木の毎年の全成長量で、年間の新築住宅が賄えるにもかかわらず、国産材の利用は二十パーセントを割り、輸入材が増え続ける。日本は世界有数の森林国でありながら、「伐ったら植える」と言う、林業の基本が成り立ちにくい状況にある。

やがて、木の住まいを求めようとした時、山には木がありながら伐り出す人が、そしてワザのある棟梁や職人がいないかもしれない？

▲木を活かし、健康的で、住まいを通じつつ手の顔の見える関係こそ、これからの住まいづくりの原点ではないだろうか。

こうした思いで『素木の会』の住まいづくりの活動を続けている。

良好な住環境は、向こう三軒両隣がお互いに影響し合って生まれてくる。新しい素材を競うよりも、時間の経過に応えてくれる自然素材の"木"を、"石油製品"に埋もれてしまった生活の中から取り戻そう。

山がイキイキして初めて、その流域の町も人も建築も健康と言えるのではないだろうか。

"木"がその地域のまちづくりに活かされる林業であってほしい。"森林を育てることは暮らしを守ること"の意識をもって……。

〝奉公先はやはり昭島〟再び車人形…
西川古柳について

吉田　靖

前号の『郷土はんのう』（第十七号）に、「車人形の創始者・西川古柳没後百年の新事実」と題して八王子車人形の創始者、西川古柳について拙文を掲載させていただいたが、その後の調査で、より確かな資料的冊子と出会う機会を得た。そこで本稿では新資料を紹介しつつ、西川古柳について再考してみたい。

前号拙稿の主要点は「飯能、阿須生まれの山岸柳吉が、十九歳のおり奉公に入ったとされる『石川酒造』の所在地は、これまで八王子説と昭島説とがあったが、実はそのどちらでもなく、福生市熊川に現存する石川酒造ではないか」とするもので、「もしこの事実が確認されれば、これまでの古柳関係資料は書替えられなければなるまい」としたものだった。

著者・久米井氏の想像画だろうか『武蔵車人形』に掲載の山岸柳吉像

ところが、最近手にすることができた久米井亮江氏（故）の労作『武蔵車人形』により、遅まきながら、やはり従来からの昭島説が最有力であるとの確信を得ることができた。

車人形の研究家として知られる久米井氏は明治三十四年、香川県に生まれ、長じて東京近辺での長い教職に就く。晩年は八王子市内の学校に勤務するかたわら、請われて同市の文化財専門委員として車人形を始めとする歴史研究に入る。

特に車人形については戦後の長い年月にわたって研究に没頭、ついに創始者としての山岸柳吉に行き着く。こうして上梓されたのが『武蔵車人形』である。

「武蔵車人形は、武蔵野の農民衆の間に生まれた伝教芸能である」との書き出しで始まる著書は、実に三四〇ページを越える大作。

氏は大神村（現・昭島市大神町）の旧家石川酒屋のこと、奉公人柳吉を知る古老の話、柳吉自作の笛や人形、柳吉・コト夫妻が残した布切れや机、明治十五年に柳吉が北多摩郡役所に提出した「人形渡世願書」、大神村戸籍記載の公募等々、丹念に調べあげ、石川酒屋と柳吉、車人形の三者の結び付きを確信したとしている。

ただ石川家は太平洋戦争の末期、米軍機の爆撃に遭っており、殆どの資料を失っていた点が、さぞ無念であったに違いない。

なぜ、これほどまで車人形に打ち込まなければならなかったのだろうか。氏は「はしがき」で書いている。

「車人形は本当のところ俗称があるだけであって、考案者の名前も時期も、その他一切伝承がない。そこで私は人形の実演を見、座元の話を聞き、昭和三年創刊の雑誌『民俗芸術』記載の八王子車人形（小田内通久著）など新聞雑誌に目を通して見た。ところが、それらの資料を照合してみると、食違いがあったりして、どれが正確なのか見当もつきかねた。」

こうして車人形を求めての氏の武蔵野踏査は開始されたという。同書、今日では車人形の原典として関係者の注目を集めている。

ではなぜ、前号記載の拙文が「福生の石川酒造」となってしまったのか。

それは昭島や八王子での市井の話を鵜のみにしてしまった結果で、軽率、早とちり、勇み足の誇りは免れない。ちょっとだけ言い訳を許していただけると亮江氏の『武蔵車人形』に出会わなかった、の一言につきる。

こうした疑問点を最初に指摘されたのは井上峰次氏である。昨年、福生の石川酒造を訪ねたさい、同社の歴史書ともいえる『石川酒造史』七冊におよぶ膨大な資料をいただいたのだが、その資料のなかに柳吉の名が全くだこうにない。「その点がどうも気になる。歴史的資料は双方にあって始めて裏付けられるのだが……。」ごもっともな指摘であり、さっそく同文書の執筆を担当された、敦賀短期大学の多仁照広教授にうかがったところ、『幕末天保のころ数年は、資料（石川家主人の日記）が残されていなかった。そのころ（柳吉が雇人として働いていた時代）大神村には確かに『石川酒屋』という名主宅が存在していた」とのこと。こうして『武蔵車人形』に出会うことになったわけである。

山岸柳吉誕生の地碑（飯能市阿須地内）

今回の問題について、本飯能郷土史研の井上峰次氏と坂口和子氏は、歴史の結び付きを、歴史を学ぶ者の基本的姿勢として深く命じられたものであった。

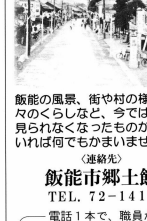
「歴史というものには〈百パーセント正しい〉ということがない。ただ前回より今回、今回より次回へと、次第に真実に迫っていくもの。したがって断定すべきではない。同時に、だからといって過ちや未消化を恐れるあまり、何もしないというのでは歴史を解明するうえでの益にはなるまい。」

ともあれ八王子車人形・山岸柳吉・石川酒屋の関係、大いに学ばされた一年ではあった。

貸して下さい！

昔の写真

〔秋に開催予定の特別展使用〕



飯能の風景、街や村の様子、人々のくらしなど、今ではもう、見られなくなったものが写っていれば何でもかまいません。

〈連絡先〉

飯能市郷土館

TEL. 72－1414

電話１本で、職員が拝借にうかがいます。

『南高麗郷土史』余話

飯能戦争の犠牲者

南高麗郷土史編集委員
増岡正文

慶応四年五月二十三日のいわゆる飯能戦争については、いろいろな資料が残されており、概要は『飯能郷土史』をはじめ、いろいろな本にも書かれていて、多くの人に知られているが、この時の被害は、飯能村、久下分村、真能寺村、中山村の四ヶ村の村役人連名の被害届によれば次の通りである。

『飯能、久下分の御高札場あたりより放火して、宿並びは残らず、裏通りはとびとびに消失してしまいました。焼失家屋は百四十八件（飯能、久下分）ほかに能仁寺、観音寺、智観寺、広渡寺が焼失し、民家に十六件（真能寺）、中山村民家に十六軒、四ヶ村合わせて寺四ヶ寺、民家二百件を消失してしまいました。もっとも人馬の被害はありませんでした。』

現在の飯能市の中心部が壊滅的な被害を被ったことは周知の事実であるが、ここにも記載されているように、人馬の被害はなかったというのが一般的な認識であると考えられる。

人馬の被害はなかったということは、飯能の町に立てこもった振武軍を討つために官軍が押し寄せ、やがて戦場になるとともに、その住民がほとんど町を離れて避難していたということだろうと考えられるが、さて、飯能の周辺の村々ではどうしたのだろうか。

古老の話によると、例えば南高麗の地域の村々でもその被害を避けるために戦争が始まったら座敷の畳を上げて囲い、その中に隠れて流れ弾をさけるようにとの触れが出されたと伝えられている。だから、町内のように家を離れてどこかに避難したということはなかったようだ。直接戦場になった地域と周辺の地域との間では、当然そうした対応の差が思いもよらない被害を生んだという事実が南高麗地区、下畑村（飯能市下畑）にあったことはあまり知られていないようだ。

下畑村と隣接する上畑村の境界、畑峠に向かう山あいに穴郷沢がある。この穴郷沢は村の表通りからは見えない、いわゆる谷津田（湿田）であり、沢の水を利用したかなり広い水田が開かれていた。この沢が下畑村の平地に流れ出る地点の遅くの山すそに馬場家があるのだが、その家の幼い兄弟が、家の近くの沢で官軍の兵士の鉄砲で撃ち殺されたという事実は、地元ではかなり知られていることである。現在でも殺された地点のそばに河原石が立てられており、馬場家では供養を欠かさないということである。また、この兄弟、綱吉、松吉の墓は、近くの金蓮寺の馬場家の墓地にあり、二人の名前がはっきりと刻まれている。

この事件の届け書は、事件発生から約五ヶ月経った明治元年十月になって、下畑村惣代、並びに下直竹村名主の名前で提出されているが、その頭書は『弾丸死失人御届書』となっており、死亡したことは明白だが、これにはだれが撃った鉄砲か書かれていない。

ところで、この兄弟は靖国神社に祀られているという説があった。この事実を馬場家の現在の当主に確かめた、あまりはっきりしない。そう言う人もいますが……ということである。南高麗の郷土史をまとめるということであれば、できればこの点をはっきりしたい。

そこで、とりあえず靖国神社に電話を入れ、その事実を調査してもらいたいと申し入れたところ、本籍地、氏名などを調べて、改めて依頼文書を送ってほしいということであった。早速必要事項を記入して手紙を出したのだが、すぐにも回答がもらえると思っていたのに、なかなか返事がこない。半分あきらめ頃になってから、靖国神社の調査を担当したO氏から自宅に電話があった。

「調査した結果、その両名の方は靖国神社には祀られておりません。ただ、調べたところ、靖国神社忠魂碑にはそれらしい名前が載せられております。」

とのことであった。

電話をもらってから一週間ほど経った平成八年の八月九日、私は靖国神社へ出かけた。調査をしていただいたO氏に会っておれをとし、忠魂碑の確認をしたいと思ったからである。郷土史の編集作業は、そろそろ追い込みの時期に入ったが、まだ内容の校正は可能だった。

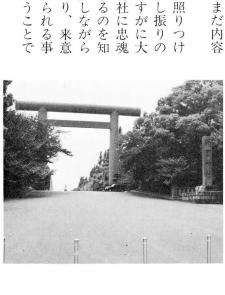
その日は真夏の日が照りつける暑い日であった。久し振りの靖国神社の大鳥居はさすがに大きかった。私は靖国神社に忠魂碑らしきものが存在するのを知らなかった。境内を探しながら社務所らしい建物へ入り、来意を告げると、O氏のおられる事務所は別の建物だということであった。

私は、その建物でO氏にお会いした。O氏はすぐに出てこられ、私の話を聞いて一しばらくお待ちください一と、いったん奥に引っ込まれた。私は少々不安であった。忠魂碑ならその場所をすぐに案内してくれるはずだと思ったからであった。

五分ほどして、O氏は十センチほどの厚さの古めかしい本を手にして出てこられた。

「これが『靖国神社忠魂史』です。この中にお尋ねの飯能戦争のことが書かれています。綱吉、松吉のお二人のことは、この部分だと思いますが……」

なんと、私は、忠魂碑と忠魂史を聞き違えていたのだ。私は内心ヒヤッとしたが、そのことは知らん顔することにした。私はそこで『靖国神社忠魂史』のその部分をコピーしてもらうことにした。次が、そこに載せられている飯能戦争に関する記事の全文である。



振武隊の掃討

曩に彰義隊を脱した浜沢成一郎ハ、同志四百余人と供に振武隊を組織し、武蔵箱根ヶ崎に拠って遠上野の同志に策応しようとしるるたが、彰義隊は五月十五日の一戦に脆くも敗走したとの報に接し、箱根ヶ崎の北方約二里の飯能に陣を進めて反旗を翻した。ここに於いて大総督府は五月二十三日佐土原藩を以てこれを討ませしめた、敗残の旧幕臣諸国軍に抗すべくもなく一戦にして潰え、浜沢等は会津を拝して榎本武揚の海軍に投じ、後相共に箱館に赴いたのであった。ここに於いて官軍は左記四名の戦死者があった。

佐土原藩　明治元年七月三日
常陸国平潟　小隊長
谷山藤之丞清理三一歳
苴山県知管下　明治元年五月二三日
武州飯野村
御用人足　馬場綱吉　二〇歳
御用人足　馬場松吉　一三歳
菊根ヶ崎　河野藤左衛門家来
秋山数馬正成　二五歳

この文にある、『武州飯野村』の御用人足、綱吉、松吉は、下畑村の、鉄砲の弾丸に撃たれて死だ二人の兄弟のことであると断定することができるだろう。

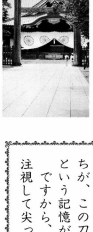
武州飯野村は、飯能という地名の当て字で、地名をあらわすならなかった人が書いたものであろうし、また、松吉の年令が十三歳となっているのは、前記の『弾丸死失人御届書』の、「松吉　辰十二歳」とあるのと一歳異なるが、これも、あまり深く考えずに間違えて記述したものとも推察できる。

それよりも、興味があるのは、この二人の兄弟が、官軍方の御用人足とされており、戦死者としてあれかれていることである。官軍がその土地土地で荷物運びや道案内のために人を雇うということは想像できるにしても、二十歳の綱吉はともかくとして、十二歳の松吉までも人足として雇ったということは理解しにくい。前記の『御届書』にも「農業に罷り出、昼食に帰宅仕居家脇小堀江足洗二罷越候ところ弾丸に相当り死失仕候儀」というのが正しく、誤射されたと書いてはないものの、事実は誤って撃ち殺されたものと考えていいだろう。

死亡した二人はその後、下成木村の末成に駐留していた官軍方の検視を受けている。官軍方の検視ということは、この時点で誤って撃ち殺したということを確認し、当惑した結果、御用人足の戦死者として処理したものと考えられる。

飯能戦争の被害が飯能の町の中心部の家屋の焼失であり、人馬の被害はなかったということは確かだろうと思うが、周辺で振武隊の落ち武者狩りのために駐留していた官軍の犠牲になった兄弟がおり、どう扱われていたかもはっきりしたことは、『南高麗郷土史』の収穫の一つであったと思う。

別に畑峠を越えた散残兵が、岩渕村の西端の岩井堂の近くの立間沢に逃げ込んで、しばらく隠れていて、村人が食料を運んだという話も残されている。この辺の村々が一橋領であったということと関係がありそうな気もするが、これは確かめようがない。



靖国神社のO氏には大変お世話になった。返事が遅れたのは、埼玉県の合祀者のカードを一枚一枚めくって調べたうえ、さらに飯能戦争ということで、あの『靖国神社忠魂史』の記録を探すのに時間がかかったためであった。こちらは多分コンピューターにでも記録されていて簡単に調べられるものと安易に考えていたが、それは間違いであった。

郷土史の編集発行を通じて、いまは、一つのことを確かめることの手立て、大切さを思い知らされたような気がしている。

先の尖った拵（こしらい）

幕末の日本刀の拵は、先の方が尖ったデザインで表われて来ます。

例えば、第42回埼玉県名刀展（平成十年五月二四日～六月七日）のポスターになる、勝海舟が江戸開城に持っていった刀がそれです。

『ハ、勝先生は、ズット前方より、刀剣の拵へ、衣服・履物の徴に至るまで、ことごとく其任を得て、人の思い付かない良き考へ、工夫をした』（『海舟座談』）『』とのエピソードが残っています。

もう一つ、お家騒動や殖産興業にあけくれた島津の殿様がもっていた、銀づくりの短刀拵も、やはり尖ったものと見たことがあります。この薩摩には波平流という刀鍛冶がいて、平安末期～幕末にかけて活躍。鍛えられた地鉄は、波のような流れを表現したものですから不思議です。

新しいところでは、波が平らくのだからと海軍の軍人たちが、この刀を好んで求めたという記憶が残っています。

ですから、拵の鑑定会では注視して尖ったものが置かれていたら、〝幕末頃〟を推測すれば、うまく的を射たことになります。

このように、時代というタテの糸と、地域社会のヨコの糸が織りなす図模様の一つとして刀の美しさを窮っていくならば、や、武骨で、かなり思い切ったデザインの刀装にも、幕末の特殊な時代観や、それを持った各人の嗜好が強く感じられるのです。

今日は美術品である刀剣類に、好みの外装をつけることが、個人の楽しみとなりました。

会場で、時代的にちぐはぐな塗や金具をまとった拵を見かけますが、絡わされた中身はどう思っているか、聞き耳をたててみたくなります。

―岡野達雄―

赤田さんを憶う

井上峰次

四月二十二日、赤田健一（喜美男）さんの突然の訃報に接し、飯能にかけがえのない人を亡くした痛恨と、長い闘病との決別でもあったことに、悲しみにゆらいだ。

赤田さんはいつとに知られた歌人であり、文筆家であり、様々な活動領域で保持者であり、文化団体のリーダーであったことは多くが知っている。しかし、飯能郷土史研究実質的な創立者であることを知る人は少ない。

昭和四十五年頃、赤田さんが市の郷土史好きに呼びかけ、加藤一先生を会長に推して、今の郷土史研究の母体が発足した。

私はその二、三年後にいそめられて入会したが、当時の郷土史研は年配者の歴史談義の会だった。そして、談論風発の自由な集いでもあった。それを赤田さんは巧みにまとめ、各人の得意をさりげなく引き出す術は絶妙だった。

その後、昭和五十三年に会報が創刊された。勿論赤田さんの手になる、私たちの機関誌の初刊だった。

それ以後「郷土はんのう」の誌名も変ることなく二十年間、八号まで出せたことは、担当者のご苦労のお蔭だが、赤田さんの基礎づくりがあったからこそと思う。

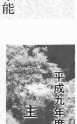
赤田さんの企画と運営の才能は卓抜していた。飯能文化協会の設立と運営についても原動力になっていたが、郷土史カルタの発行がその好例かもしれない。文学に対する情熱と共に歴史への関心も深く、子どもたちへも郷土の歴史を平明に、簡潔に伝えたい意図と、カルタ遊びの復活を願ってのことと記憶している。赤田さんの周到な準備と、気配りと、文学的なセンスが忘れられない。カルタには赤田さんの作品が多く残されている。

赤田さんの第一歌集「榛野」の序に、打木村治先生は、「美しき悲絶」と書かれた。正に「榛野」を通してみた感懐の吐露だと思うが、第二歌集「谷の空」は柔らかな拡がりをもつ歌が多くなったように思える。次の第三歌集はどうなるかを待っていたが、もう赤田さんの手になる歌集を見ることは出来ない。

赤田さんの市の職員としての勤めは、図書館、公民館が長かったが、それが多くの市民に接する機会を造り、赤田方式の指導をしていたく人場にもなった。

今思えば、赤田さんの繊細で且つ懸命な生き様は、或いはクリスチャンとしての愛に支えられていたのかも知れない。

ひたすら御霊の安らかであるそと思う。



◎**五月例会**（5/4）
地場産業の見学会　参加16名
六月総会（6/2）
総会と記念座談会
「身近な文化財
―木の文化を つくるー」
講師　吉野　勲氏
曽根原　裕明氏
◆「郷土はんのう」第17号発行
◎**十月例会**
絵馬の見学会を予定していたのですが、郷土館の特別展「飯能の絵馬展」（10/18～10/29）に沿って見学会は中止し、「飯能の絵馬・調査報告会」として開催。
講師　岡野　達雄氏
◎**二月例会**（2/2）
見学会…拝島方面
武蔵車人形の育った土地
講師　吉田　晴氏
参加15名

講師　駿河台大学教授
手塚　映　男氏
「飯能地方の植生」
◆「郷土はんのう」第18号発行
▼**九月**
歴史散歩
秩父氏の足跡を歩いてみる
三峰神社～大滝温泉
▼十二月
研究発表会
事後学習会
▼二月
名栗村の見学会

▼**四月**
「コマの歴史」
講師　八木田　宜　子氏
▼**六月**
総会・講演会

入会のお勧め！

当会では、広く会員を募集しております。会員は、いつでも気楽に、地方の歴史・民俗・文化などについて話し合っています。

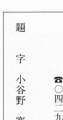
入会希望は……

飯能市郷土館内まで

☎〇四二九―七二―四一四四

会からひとこと

誠に恐縮ではありますが、年会費、五〇〇円をお願い申し上げます。



うしろがき…

「料理人が多すぎるとスープがうまくできない」という、イギリスの代表的な表現があります。

飯能に残る、あれこれを味わおうとしているのですが……。

今回のスープの味はいかがでしょうか？

（岡野）

おくやみ

島田弘一
平成十年三月二十二日
四十二歳

赤田健一（喜美男）
平成十年四月二十二日
六十七歳

小谷野寛一
平成十年六月二十三日
八十八歳

郷土はんのう　第十八号
発行日　平成十年六月二十八日
発行所　飯能市郷土史研究会
飯能市飯能二五八一一
飯能市郷土館内（〒357-0003）
☎〇四二九七二一四一四四
題字　小谷野寛一